

「数字」と「言葉」序説

——社会学方法論の研究（6）

水谷史男

私たちは、「啓蒙」のような、人間がものを考える時の企てを、社会学がよくやるように、それぞれの時代に関連づけられます。啓蒙の時代は、伝統や偏見といったすべての拘束から解き放つて、理性により人間の諸関係を新たに構成する努力がなされたと私たちは理解していますね。つまりその営みは、十八世紀にその頂点に達したのち、その後は急速に価値を失っていったことも。私たちは十九世紀と二十世紀には社会学をそこに充当します。社会学は、その実証的科学性を誇り、普遍的・人間的理性の変わらぬ法則ではなく、検証可能な事実や社会的行為の条件に抛りどころを求めたのです。そのために社会学は、啓蒙的楽天主義の退潮のあとで、自らを懐疑的学問だと主張するかもしれません。その懐疑的学問は、自己の研究の未来に対して、その研究が十分に責任を取れないような方法論的規則に従って研究を進めることになりました。（ニコラス・ルーマン「社会学的啓蒙」訳は筆者）

はじめに

一 量と質、数字と言葉

二 方法の問題 数字・数学・数理

三 言葉の分析 数字で言葉を分析する 言葉で言葉を分析する
おわりに

「数字」と「言葉」序説

はじめに

いまさら言うまでもないが、社会学は、日々生起し変化している複雑多様な社会現象を対象として、一定の視点から問題を設定し、その実態を把握し、その生成メカニズムや因果関係を説明するために、さまざまな命題や仮説を検証する社会調査を行う、とされている。こうした研究活動の方法的態度のもとには、これもよく知られているように、まずは社会学の創始者とされるコントが唱えた「実証主義」がある。実証主義は、人間の作る社会について古くから思惟をめぐらしてきた「人文学的伝統」、神学や哲学や、倫理学や社会思想やらと呼ばれていた学問から距離を置き、西欧で一七世紀に数多くの発見をもたらした自然科学の成果に触発されて、続く一八世紀に華々しく新しい知的革新を謳って登場した「啓蒙 enlightenment, Aufklärung」の流れを受け継ぐ思想と、いちおう考えておく。

「啓蒙」の思想家たちは、人間の理性の光によって過去の伝統や神話に縛られた世界の暗闇(蒙)を照らし開(啓)くことを、人類の進歩として高らかに語ったが、そこにはいくつかの潮流が含まれていた。実証主義のひとつの源流である経験主義は、ロック、スミスなどのイギリスで発展して産業化・資本主義化を導く思想となり、もうひとつの合理主義は、モンテスキュー、ルソーなどのフランスで展開され、フランス大革命のような社会変動を留意したけれども、一九世紀の初めの革命と戦乱、ナポレオンの栄光と没落を目にして、「啓蒙」の輝きはすっかり色褪せてしまった。啓蒙主義からは人権や平等や自由といった輝かしい理念は生まれただけでも、来るべき社会がどのようなものになるのか、それ以前に今ある眼前の社会で起きていることを、どう捉えればよいのか。

頭と言葉でユートピアを語るのではなく、自然科学者が開発したやり方、つまり実験や観察によって正確で確実な知識を蓄積し、それを「実証的精神」で説明し法則を発見する、この方法を人間が作っている「社会」を対象に行うことこそ必要である、とサン・シモンを引き継いだコントは主張したわけである。

そうやって社会学なるものがが発したとすれば、社会学の研究は自然科学のように、社会現象を距離を置いて客観的に測定し、できればあいまいな概念に満ちた形容詞的言葉ではなく、測定器で測った数値として記録し分析するのが望ましいことになる。コントはそのような道具や作業にとりかかるともいっていたであろうが、その前に彼の寿命が尽きた。しかし、この方向は社会学という名前とともに継承され、統計を駆使したデュルケームを筆頭に、二〇世紀になると「実証主義的方法」は一段と精緻なものになって、やがてアメリカで数量的な大量データを積み上げる社会調査法を普及させた。

しかし一方で、社会学の内部でも、自然科学と同じ方法で社会を研究できると考える「実証主義」への懐疑的立場を表明する社会学者は少なからずいた。富永健一は、一九世紀以来のこの方法論上の対立を整理して「実証主義対理念主義」(Positivism vs. Idealism)と呼んだが、これは現在まで社会学内部に大きな二つの異なる立場として存在しているとみる。⁽¹⁾ 富永のあげる「理念主義」には、ドイツのデルタイなどの歴史学派、フッサールに由来する現象学、フランクフルト学派などのマルクス主義と批判理論、そしてM・ヴェーバーの行為理論までの潮流を含む。また、「実証主義」の二〇世紀の社会科学での展開は、論理実証主義に補強されて経済学、政治学などと並行しつつ社会学内部では、均衡理論、システム理論、機能主義などが総合される形でパーソンズに集約される理論と、数量分析に重きを置く社会調査法の進歩をあげる。

本稿では、このような見取り図を頭において、社会学における方法としての基本的な問題を、「実証主義」と「理念主義」をそもそも相容れないものとして振り分けるのではなく、社会現象を捉える際に用いられる道具として、数字と言葉の意味という角度から考えてみたい。

一 量と質、数字と言葉

現在、社会調査の方法を大別して「量的調査」と「質的調査」がある、という言い方が使われている。しかしこれは誤解を招く言葉で、単純に言えば「量的調査」の意味するところは、データが数字であり、社会現象を数量的なデータになるように尺度や測定法を設計され、記録された調査というものである。その限りでは、政府の行なう統計調査も、新聞社の行なう世論調査も、社会学者の行なう学術調査も、データが数字であるなら「量的調査」ということになる。では、これとは異なる「質的調査」とはどんなものなのか？ たんにデータが数字ではない、つまり言葉や映像のような形で記録されるデータとそれを収集する調査が「質的調査」なのだろうか？ 「質的データ」という用語もあるが、これは測定尺度が名義尺度か順位尺度でとられた、おもに数字で記録され処理されるデータのことを指すので、データは数字である。数字がそのまま対象の量的大きさを示している「量的データ」に対して、「質的データ」の数字はカテゴリーに分類のための番号を振っただけものだから「質的」なのである。「量的データ」は等間隔（絶対ゼロ点をもつ比率尺度も含めて）の測定数値を前提にしている。このようにデータが数字で記録されているからと言って、「量的データ」と「質的データ」では数字が示す内容は

異なるので、分析に使える数学的手法も異なってくるというのは、調査の初歩知識である。

これに対していわゆる「質的調査」と呼ばれるさまざまな調査法は、数字ではない言葉や情報を、聴き取りインタビューの記録や、書かれた文字記録や自由な語りや、ときには写真やビデオ映像までデータとみなして研究の手がかりとする調査を意味する。これは、対象のもつ一つの特性を一つの尺度で測定した数量的データを、あとで統計的手法を使って数量分析にかけるような「量的な調査」の「実証的」方法とはまったく違うやり方である。

「量的な調査」で得られたデータが描き出すのは、大量現象としての人間集団の全体像の縮図であって、まずは構成比率とか分布とかの数値によって示される。その設計の段階で指標や尺度はあらかじめ一定の仮説や理論を想定している場合が多く、データ分析は変数間の相関をみたり条件を操作したりしてその仮説を検証することに意味があるのだが、個々の回答者（標本）の自身は問わない（質問に組み込んだ属性要因はもちろん変数として考慮する）。

これに対して、いわゆる「質的な調査」の方は、あらかじめいくつか質問項目は用意してある場合も、回答者や記述の自身は通常日常言語としての言葉であり、それをまずはそのまま音声や文字として記録したものがデータになる。そこからは複数の人間集団の全体像や要素間の厳密な比較が可能となる情報は区別できにくい。なによりも「量的な調査」が十分な、つまり大量母集団から選ばれた統計的に意味のある多数の標本と同じ質問をすることを必要とするのに対して、いわゆる「質的な調査」は、調査対象の「数で勝負」することを初めから捨てている。

問題がごく一部の少数者だけを当事者とする場合であるならば、アプローチと合意（ラポール）さえできればその大半を調査することも不可能ではないだろうが、より多くの人々が抱える問題を「質的な調査」で広範に捉えることは、現実的に困難であろう。インタビュ回答者を増やすことに努力を傾けるより、少数でもその得られた語りのデータ情報からどれだけ（数量統計的ではない）意味のある発見を引き出せるか、「言葉の勝負」になる。これはある意味ジレンマを内包するが、そこを技法的になんとかクリアしようとするのが、語られた言葉だけに注意を集中する「グラウンデッド・セオリー」や「エスノメソドロジー」といった言語分析の試みだろう。数字が量の勝負であり、言葉は質の勝負だといわれれば、なんとなくわかったような気がしないでもない。

しかし、この量と質という概念をよく考えてみるとなかなか厄介なもので、たとえばこういう議論がある。簡単な例で考えてみる。水を徐々に熱していくと、正常気圧のもとではある温度までは液体だが、そこを超えると水蒸気となって蒸発することは、小学生でも実験で確かめることができる。これをビーカー内の一定量の水の温度や重量・体積という数量的に測定できる指標で表わされていた水が、温度計や秤では測定できない気体になってしまうので、量的規定から質的規定に変わったと考えることもできそうである。量の変化が質の変化に転化すると言ってよいだろうか。沸騰点に達しない間も、水の蒸発は始まっているし、重量や体積はつねに変化している。また、鉄は熱していくと赤くなりさらに高温では白熱し、そしてどろっと溶けはじめる。あるいは二度の冷たい水はバターを溶かさないが九〇度の湯水は溶かすという現象を、温度という量の連続的な変化ではなくその機能や形態の質の相違と考えてもいいかもしれない。

これに関して大森莊蔵は、こういう説明をしている。

水蒸気と水（液体）との相違は質的相違であること、沸騰点以下の水の温度の差は量的差異であることを仮定する。すると量質転換の事例としての水の沸騰は次のことを意味する。即ち水を熱して行く場合、我々は気体と液体という質、及び水の温度という量的規定の二つに着目する。その場合他の諸性質、諸関係を無視する。そうしてこの着目した量的規定と質的規定の間に量質転換という過程が見られるというのである。この限りに於ては、この命題は確かに正しい。勿論水の沸騰というような簡単な事例からもっと複雑な現象に移る時には着目すべきものは二つには限らず、数多いものであろう。然し要点は量質転換の過程に入り込む、量的、質的規定が予め着目されている必要があるということである。しかも何々が質的規定であり、これこれが量的規定であると定めておかねばならない。従つて勿論の事であるが、或る特定の現象（自然的、社会的何れにせよ）に含まれる任意の質的規定と任意の量的規定との間に量質転換が起こるということは絶対に言えない。更に、或る現象の中の一つ又は一群の量的規定とされた規定を考え、その量的規定を一定の方向に増減させて行けば、どこかで何らかの質的変化が必ず起こるといふ事は意味がない。この場合、いくら量的増減をして行つても何等質的変化が起こらなくとも、この命題は否定された事にはならない。何となれば、更に増減を続ければ、いつか何らかの質的変化が起るかもしれぬ可能性を否定できないからである。世界はいつか必ず亡びる、いつか必ず太陽は昇らない、といふ事はどんな経験的事実をもつても否定することができるのと同じである。このように時間の区切りのない「いつか」を以てした主張は経験的に否定する機会が論理的にないわけであるから、どんな事でも（それ自身に矛盾を含まぬ限り）主張でき、それ故経験の意味をもたぬと考へてよい。（経験に関する普遍命題の完全検証不可能性を裏返したものである。）

それ故先の命題は、大よそにでもかくかくの量的規定をかくかくの程度に迄増減した場合にという事を指定し、更に質的規定の範囲を指定せねば無意味である。そのような指定をせねばならぬという事は、とりも直さずそのような指定を個々の現象についてするか、または一般的な指定の仕方を示さねばならぬ事を意味する。このどちらかをしない限り量質転換はその成立する範囲が定まらない。⁽²⁾

これに続く部分で、大森は一般にある概念が持つ意味には大きく分けて二種類の傾向があり、ひとつは積木細工の一部をなす積木のように、文脈に影響されることなく固定した概念を保持するもの、つまり名詞的概念である。犬とか机とかは意味は固定している。これに対し、その概念が使用に際して文脈によって意味が揺れ動くようなもの、たとえばAという人の性格、といったものは固定した普遍のものはありません、その人を取り巻く人間関係や状況や時間といった文脈でいくらかでも揺れ動く。こちらの性格概念は、さまざまな状況のなかでその人が示す反応の総体に「優しい」とか「怒りっぽい」とか形容詞的名称を与えているわけである。言語論的にはさらに細かく分類もできるだろうが、ここでは、これを「量的な調査」と「質的な調査」の相違点に絡めて考えて、前者が数量データに対応し、後者が言語的データに対応するとしてみよう。

数量的な調査が測定するのは、一つの尺度で正確に定義された変数、つまり固定した概念を変数として測定できるものである。心理学がやるように、人の性格を複数の要素に分割しておいて、その各要素を指標化して測定し(できるだけ間隔尺度以上の数量データにして)、それを多変量解析にかければ、その人の性格がマトリックス上のどこかに示される、というような戦略をとる。一方、数量的でない調査、つまり数字を使わない「質的な」

調査データの場合は、このような操作はそもそも不可能であるから、取るべき方策は、その人物の言葉や映像から得たデータを無理やりにでも数量化して分析可能な形にまで加工するか（「内容分析」法はこれに近い）、言葉や映像はそのまま保存してその文脈や状況についてどこまで読み解けるかを試すしかない。

社会調査でもし量質の概念転換がありうるとしたら、どんな場合だろう。量的調査は質問紙に並べられた測定項目は数値として把握されるが、それ以外の要因は無視されている。社会現象は二つか三つの要素に限定して他を捨象したような実験室での測定はやったとしても当たり前の結果しか得られないから社会的にはさして意味はない。ある現象を多面的に捉える必要があるが、質問をむやみに増やすには限度がある。そして、ひとつの量的指標を操作的に増大させていくことで、研究対象（それは人間の行動や意識だが）に質的变化が起こるとすれば、たとえばエスノメソドロジーの違背実験のように、わざと無意味な質問を繰り返して回答者に戸惑いや怒りを惹起するといったことが考えられる。しかし、それは状況や文脈をあぶり出すための作爲的な実験であって、固定した二変数の連続的変容のなかで起こる変化とはいえない。

いずれにしても、通常の数量的調査が使用する正確に定義された概念に対応しない、日常言語の言葉に含まれる個々の概念や特性を取り出して、あえて正確に定義しようとしても失敗する。大森はむしろ、そのあいまいさを認めてしまう方がよいと考える。

この種の概念が働く様々な状況、文脈は非常に広い場合が多い。或る状況、或る文脈におけるこの概念の働きは非常に明確で実際的にその理解は十分なものであったとしても、他の場合には必ずしもそうとはいえ

ない。概念は絶えず新しい状況に面して、類比により、他の概念との関連により、拡張されたり誇張されたりして変容を受けて行く。この過程に於て、初めの間使用されていた状況や文脈では明確であったものが、屢々曖昧になったり多義になったり空虚に使われたりしてくる。ヴィッツゲンシュタインは之を言葉がお祭りをするとか、言葉の日曜日とかと呼んでいる。そのような場合は当然この概念の祝祭日的振る舞いを真面目な月曜日に戻すことが必要になる。(中略)

然し、量質概念が或る場合に信頼できない挙動を示すからといって、すべての場合にその不信を拡大するのは間違っていることは当然の事である。日常生活、又科学に於て量質概念は充分明確であり、我々は絶えずこの概念によって多くの事を言い表し、情報を伝え、又受け取っている。そしてその場合、誤解や誤伝の起る場合は非常に稀である。これを示すには何も例を挙げる迄もない。この範囲に於ては量質概念は何も分析する必要はなく、せいぜいの所言い直しや補足的説明で事は済むのである。危険の生じるのはいわばこのような固い地盤の上ではなく、その概念が非常に一般的な又抽象的な枠で働く時である。この危険を避けるには、唯個々の場合について、細心な注意を払う以外に方法はないように思える。³⁾

フッサールの「生活世界」での相互行為場面においては、自然言語はそのままの形で充分機能し支障はないから、むしろそこに人工的な概念を持ち込むことによっていらざる混乱や言葉の物神化に注意をした方がよいということになるのかもしれない。⁴⁾

二 方法の問題 数字・数学・数理

社会科学というものを自然科学と同じ方法論で、つまり物理学に典型的な実験や観察から得られた観測データをもとに、自然現象を論理整合的な因果関係や関数関係として仮説や理論を経験的に検証するという方法で研究することが可能であり、望ましいと考えるのが実証主義の立場だとすることには、今日いくつか留保がつけられる。自然科学といっても物理学のような機械論的な数理を現象の説明に適用できる分野と、生命現象のような幅や揺れをもった研究分野では、実験や観察といっても質と量に違いがあるという指摘はそれなりに認められる。動物の行動も、人間ほど複雑ではないにせよ個体差や環境の影響で変異があるから、そこを考慮しない理論では硬直してしまって問題がある。

しかし、そういう問題よりも、実証主義を批判してきた伝統的な反実証主義、富永健一の言う「理念主義」が問題にしてきた力点は、そもそも人間が関与する社会現象は、自然現象とは質的に違うものであって、物理現象や化学変化のように条件をコントロールして、しかるべき結果が導かれ予測が可能であるようなものではないという立場である。そこからは、社会の研究には自然科学とは別の方法が必要になるという結論が導かれる。そうした立場からの実証主義批判は、同時に数量統計的方法に対しては否定的に傾いて、調査による経験的研究を重視する場合でも数字ではなく「個性記述的」な言葉の表現を重視する。

逆に言えば、実証主義の方法を貫いて社会現象を研究することに成功した社会科学とはどんなものか、と問えば、経済学と心理学（あるいは政治学）があげられると富永なら答えるだろう。経済学はワルラスの均衡理論以

後、ミクロ経済学の数学的分析理論によって完璧とも言えそうな達成を見た。経済現象の研究は、この理論に数量的データを投入すればよい。しかし、それは人間の経済的行為のうちに「効用 $U(x, y, z)$ 」という人工的な概念をもちこむことで成立することができた。社会学からみるとこの効用という架空の概念を、そのまま受け容れるのは難しい。それは単に測定された数値をみれば確かめられるとはいえない。使用される概念およびそれを組み立てる論理を精査する必要がある。

ミクロ経済学の基本的な三つの道具立てのうち、価格と数量は客観的に測定され表示される明確な概念である。ところがこれに対して効用というのは人間の主観的な心の状態であり、これを客観的に測定して数値であらわすというとはいえない可能性か、ということはその自体大きな問題である。心理学と社会学には、一九三〇年代以来開発されてきた質問紙法による「態度」の尺度化という手法があつて、たとえば生活満足度の尺度化といった作業がじっさいに行われて来ている。だからこれを消費者行動に適用して、経済的な効用の測定を試みることも、もちろん考えられてよいであろう。ただしその場合、満足というのは本来的に相対的なもので、異なる個人間の比較に関してはもとより、同一個人であつても境遇を異にする過去と現在とでは、比較を成し得る絶対的な基準を欠く。だから心理学や社会学の尺度化法では、態度尺度は順序尺度 (Ordinary scale) であつて間隔尺度 (interval scale) ではなご。

(中略) すなわち、効用というのはAよりもBが望ましいといった相対比較(経済学者はこれを選好 preference という)をあらわす序数であるにとどまり、AよりもBが何倍望ましいかという情報を含んだ数、

すなわち基数として考えることはできないというところに結論が落ち着いたのである。だからたとえば縦軸に効用をとり横軸に数量をとって曲線を引くというような操作も、じつは恣意的なやり方であって厳密には許されないことである、といわねばならない。⁽⁵⁾

効用というのは普通の日本語で言えば、人が味わう幸福とか満足とかを意味するだろうが、それを量的に測定し数字にできないければこうした経済学は成立しない。それはあくまで実証主義的な分析を可能にするための仮構なのだけれども、反実証主義者の立場からすれば皮相な虚構でしかない。ここで問題になるのは、実証主義といっても単純な経験主義、とにかく実験や観察をしてそこから出てきたデータから意味ある認識を導くというJ・S・ミルのな帰納論理と、純粹にア・プリオリな数学的・論理的演算から出てくる演繹的命題を経験的データに結びつけてテストしようとする立場ではかなり異なることである。

論理学は記号の一形態としての言語に頼ってきたが、これを変数・函数・和・積など数学の記号体系に用いられてきた概念をもちこんで、高度に形式化する演繹的推理を展開したのが一九二〇年代にウィーンで始まった論理実証主義である。これを、イギリスでさらに彫琢したのがB・ラッセルであり、彼は、経験的事実に照らしてその真偽が問われる命題と純粹にア・プリオリかつ形式的に数学的ないし論理学的演算の規則に照らしてその真偽が問われる命題を区別して、前者を「原子命題」(atomic proposition)、後者を「分子命題」(molecular proposition)と呼んで区別した。⁽⁶⁾ 原子命題が個別の経験的事実から導かれ、あるいは経験的事実と照合すること
で真偽を判定され、論理的には相互に独立であるのに対し、分子命題は経験的事実から出発したにせよ数学や論

理学といった推論によって条件を特定されなければ真偽は判定されない。「もし…ならば」や「もし…でないならば」といった複数の命題を論理的に結合して得られる推論が必要だと考える。そうになると観察や実験（そして社会科学の場合なら統計や調査）の結果から原子命題は検証されるが、分子命題は数学や論理学の助けが必要になってくる。

たとえばジョン・スチュアート・ミルの帰納法論理学の主題であった因果関係の推理という問題をもう一度考えよう。「このバラは育ちが悪い」という原子命題の定立は、そのバラを観察することによってなされ得る。社会科学的原子命題もまた、社会的事実についての観察によってなされ得る。もつとも、前者の場合には、おなじように観察といってもその観察の手續きが通常なかなかないへんで、たとえば「現在の日本では公務員世帯の貯蓄率はそれ以外の世帯の平均貯蓄率よりも低い」とか「昭和五〇年の日本全国の世代間職業粗移動率は農村部よりも都市部の方が高い」といった調査報告文もそれぞれ原子命題であるが、この命題の定立には膨大な金と手間をかけた調査データの収集と分析がなければならぬ。しかしそのような手数の差はあっても、これらの命題は対象を単純に観察しさえすれば定立できるという点では、共通している。

これに対して、因果推論に関する命題ということになると、単純観察だけでは決してそのような命題を立てることはできない。たとえば、「このバラの育ちが悪いのは肥料がたりないからだ」という分子命題を考えてみよう。バラの育ちのよしあしは、肥料によっても異なるであろうが、同時に日照や水ハケや病虫害等々によっても異なるであろう。その中から肥料という要因が育ちの悪い原因であると特定することができる

めには、そのような推論の根拠となる実験的データと、それらのデータを結論の導出にむすびつける論理とが必要になってくる。

(中略)

たとえば、「公務員世帯の貯蓄率が低いのは、公務員の公的年金給付の期待水準が高いからだ」という分子命題を考えてみよう。貯蓄率を左右する要因として公的年金給付の期待水準はたしかに重要である（老後が安心なら人は無理してまで貯蓄しない）と考えられるが、貯蓄率に影響を与える要因はそのほかにも数多く考えられ、所得・実物資産・住宅事情、定年の有無・定年後の再就職の機会等々の諸要因についての検討がなされないと、公的年金給付だけを原因とするわけにいかない。この問題を解くためには、個々の説明変数の一単位あたりの変化が被説明変数である貯蓄率に及ぼす効果の度合いを分析する手法が必要である。たとえば重回帰分析や分散分析の使用はこの目的に適したものである^⑧。

このような論理実証主義によって、古典的な実証主義のもつ難点を克服して科学理論としての有効性を高める立場は、一九五〇年代にはK・ポパーの反証可能性テーゼにまで展開した。ポパーは、自然科学と社会科学の一元論の立場から、科学の装いをまとった検証不可能な歴史法則を唱える歴史主義を、たんなる形而上学に等しいと否定した^⑧。この方法論をめぐる対立は、やがて一九六一年にドイツ社会学会の研究集会で行われたポパーとアドルノの「社会科学の論理」をめぐる報告と討論によって広く知られ、さらに論理実証主義とこれに対するフランクフルト学派のそれぞれの次世代、H・アルバートとJ・ハバーマスらが引き継いだ「ドイツ社会学における

実証主義論争」の対決として繰り返し議論が続いたことは有名である。⁽⁹⁾

両者の議論は結局かみあわなかったものの、社会科学における「実証主義」と「理念主義」の主要な論点の相違を明確に提示したものとしてみられている。それからすでに半世紀以上が経過した現在、社会学というディシプリンのなかで方法論の変革は起こったのだろうか？ 少なくとも一九六〇年代の数量的社会調査の隆盛期に「実証主義」の側ではコンピュータの普及に伴って、多変量解析などの手法の進展と教育が進み、同時にこれと並行していわゆる「言語論的転回」の潮流もシンボリック・インタラクショニズム、エスノメソドロロジーの会話分析、生活史研究、解釈学やオーラル・ヒストリー研究など、さまざまな試みが社会学の一分野として定着してきたとみられる。しかし、実証主義の立場に立つ数量的社会調査の側は、標本調査の信頼性や代表制を脅かす回収率の低下や調査への回答者の拒否のような現実的困難が強まり、理念主義の側でも経験的社会調査をいかにして行うかという点で、少数の事例への聴き取りインタビューの言葉を集めて言説分析を行う以外に有効な方法は見いだせないような場所に沈潜している。

三 言葉の分析 数字で言葉を分析する 言葉で言葉を分析する

社会現象を研究するために、精選され厳密に定義された概念を用意し、測定の道具を工夫して量的な数字（数値データ）を集め、これを理論や仮説と照合して一定の知見を導くという方法は、実証主義の立場からは当然とるべきオーソドックスな手順である。しかし、それはいくつか原理的な欠点をもっているとみて、これに疑問を

抱く研究者は、数字ではなく人の語る言葉、あるいは書き残した文章をそのまま採集して、そこからしかるべき仮説の裏付けをひき出そうとする。すでにみたように、数字がものをいうのは対象の「量的」な捉え方であり、「質的」な特性は文脈に依存した言葉によって行為の意味や、目的、それがもつ特性を捉えようとする。しかし、一九世紀的な社会科学があまり出出した諸概念では、フッサールの現象学が標的にしたように、いくら精緻な測定用具を用意し、大量現象としての人間の行動や意識を調査したとしても、それは人工的作爲的な専門知を積み上げるばかりで、自然科学が達成したような実践的な応用技術として「役に立つ」未来予測も有効な処方箋も提供することには最終的に到達しない。

そこで、ひとまず素朴な「実証主義」の方法論をカッコに入れて、言葉が示すものをそのままデータとして活用する新たな方法はないものだろうか、二〇世紀の「理念主義」は、数量化ではなく言語分析に向かう。だが、記号論理の言語学や構造主義的方法は、むしろ話されている言葉を経験的に採集することになるから、言語「実証主義」に近いものになる。「理念主義」に立つ社会学者にとっては、人間の相互行為における動機や意味をどう説明するかが問題になるから、そこで「行為の主観の意味理解」あるいは「動機の意味理解」などは果たして可能かという原理的な問題が提起されることになる。他者が心のうちで何を考えているかは、いくらじっと観察してみても水や植物の観察とはわけが違い、温度計やリトマス試験紙のような手段があるわけもない。この問題は「実証主義」では測定不可能である以上ブラックボックスとして触れないか、代替的な方法、つまり性格類型論程度の「質的」分類にあてはめて終わりにするしかない。

経済学の「効用」概念や、心理学の「欲求」概念は、それらが「量的」に測定可能なものとして設定される。

それは操作可能な一要素、変数としてあらかじめ定義されている。しかし社会学の「動機」とか「価値」とかいう概念は、そもそも「量的」測定は不可能なものとして考えられており、行為者Aがある動機xからある状況のなかである行為Bを実行したという結果としての事実だけが観察可能だと考える。したがって分析は行為Bから推測して行為者Aの動機xを特定しようとする。しかしそれはいくつかの類型に収まるほど単純ではなく、多くの条件の制約のなかでなおかつ複雑な現われかたをする。

たとえば、中学生男子A君が学校の屋上から飛び降りて亡くなってしまったという場合、それは具体的な事件であるから事実経過は調べればかなり明らかにはなるだろう。しかし、彼がほんとうは何を考えていたか？どうして飛び降りようと思ったのか、はもはや確かめようもないのだ。

「動機の意味理解」という問題は、他者の心のなかで起きていることを人は知ることができるのか、という厄介な問題を「量的」ではなく「質的」に、数字ではなく言葉から解を導こうとする試みなのだ。これをめぐってヴェーバーやシュッツは、さまざまに考察を行った。それらの「理念主義」について、富永健一は以下のような総括を述べている。

シュッツの結論はこうである。すなわち、自我が他者の目的動機 (Um-zu-Motiv) を想像の中で自分自身の目的動機にしてしまい、その目的動機に指向した自分自身の行為の模擬履行を、他者の行為を体験するための解釈図式 (Deutungsschema) として使う、ということによって自我は他者を理解するのであると。あるいは、つぎのようによい。他者の主観はどこまでも他者の主観であって、けっして自分の主観に

なりえないのではあるが、経験の共有によって他者の主観に自分の主観をいわば重ねあわせ、想像上で自分がおなじ目的をもった行為をする場合を想定すれば、それはあたかも自分自身の過去の行為を想起によって再生する場合とおなじく、他者の行為を自己解釈の対象にしてしまうことができる、と。シュッツはこの説明を感情移入による説明とは違うとする。そのポイントは、他者理解を自己理解の一種のように読みかえることによって、本来自己理解の説明に対して適合的であるが他者理解の説明に対しては適合的でない現象学的意識分析を、他者理解に拡張適用できるように工夫した点にある、ということができようであろう。そのさい、現象学の視野を社会的事実の説明原理へと拡大するうえでの大きな障害になっていたあの現象学的還元による超越論的領域にとどまることにこだわらず、ひとたび内的時間意識の分析図式を確立したあとは、そのせまい枠から抜け出て、社会的世界についての考察は自然的態度の領域でなされるべきものとしたところに、フッサールをこえたシュッツの成功の源泉があつたといつてよいであろう。(中略)

私は、現象学的社会学というのは要するに、自我意識の拡大によって我と汝が意識の上で融合していく現象を説明しようとする、社会意識論の一つの形態であると思う。それは一九二〇年代におけるシェーラー以来半世紀をこえる実績をすでに有しており、近年の運動の昂揚を別としても社会学史の上に一定の位置をもつものである。ただそれは要するに社会意識論であるから、そういうものとして構造―機能理論や計量的な社会構造分析を側面から補完する役目を果たしようとしても、それらにとって代わるものではないであろう。⁽¹⁰⁾

このような富永の、現象学的社会学が「社会意識論」として一括できるとする見解、そして実証主義の伝統を

踏まえた構造―機能理論や社会システム論を社会調査に適用した計量的な構造分析こそが、あくまで社会学の王道であり、数字ではなく言語による主観的意識にこだわる「理念主義」の試みができることはせいぜい「側面から補充する」ことにとどまる、という見解には、一九世紀以来の近代科学の方法論への強い信頼を感じるとともに、共同主観性や動機の理解可能性というような「哲学的」問題設定への冷視（あるいは蔑視）を筆者は垣間見る。これに対して「理念主義」の側からは、単なる数量統計的方法への対案としての言語記録、たとえば生活史のごとき個人のオーラル・ヒストリーを書き連ねることで、独自の「リアリティ」を主張する研究が対置される。これは単に「社会意識論」の枠内に収まるものだろうか？

いまそれを、ひとつの事例、日系ペルー人のエスニシティ変容をテーマとする有末賢の生活史研究の一部を参照してみよう。

Rさんは子供たちも大きくなり、夫の病氣も落ち着いている状態だった一九八一年に、最初は「気晴らし」というつもりで友達に誘われてニューヨークに遊びに行ったことがあった。そして、そこで「働き口」を見つけて何とビザが切れたまま四年間も、ベビーシッターの仕事をしていたのである。それも、友達からの紹介で、アメリカ人と結婚した日本人女性が縫製工場の仕事が忙しく、生まれて間もない赤ちゃんをRさんが「乳母」のような形で育てていたということである。そして、ベビーシッターの仕事始めて六カ月が経った頃、日曜日の夜、ニューヨークの電車の駅で黒人に首を絞められて財布や家の鍵などを強奪され、そのうえ、電車が走ってくる直前を線路に落とされもう少しで死ぬところだったという恐ろしい体験までしている。

その時には、さすがにペルーに一旦は帰るが、その四か月後には、どうしてもRさんでなければ子供がなつかない」と泣いて頼まれて、再度アメリカに渡って、それから三年以上もベビーシッターをしたのである。

この話からも、Rさんが「伝統的な女役割」に忠実な、生涯を家事、育児に傾注してきたような印象を受ける。幼少期の父母との死別などから、「家族を大事にする」という考え方が自然と身に沁み込んできたのかもかもしれない。しかし、Rさんは夫のことを、よく冗談口調で「ウチの馬鹿おやじ」と言ったりする。その夫T氏が亡くなったのは、一九八九年であり、日本に来る前の年ということになる。実の兄も、Rさんがニューヨークに行っている時に亡くなっており、そういう意味では「先行世代が亡くなった後は、子供や孫たちに囲まれながら暮らす」という日本人の伝統的な家族観を実践しているだけなのかもしれない。そのことがグローバルな移動や「出稼ぎ」と結び付いたのは、Rさんの側の要因ではなくて、単なる偶然であったのだろう。「意図せざる結果」としての長期的な滞在という現象はRさんの事例ばかりではなくて、Rさんの子供たち、孫たちのほうにも言える。^①

現実の相互行為で話された言葉そのものに、分析の焦点を限定する禁欲的なエスノメソドロジの方法に比べて、生活史の記録は語られた発言そのものを忠実に記録するだけでなく、特定個人の生きてきた時間軸に沿って事跡を追跡しようとする指向があるために、「ライフ・ストーリー」としてもやや恣意的な物語性に親近していく。このペルーから日本にやってきた女性の生活史の場合もそれを追うことで、有末はそこここに「伝統的な女役割」とか「日本人の価値観」といった概念を持ち込んで整合的な説明を行おうとする。しかし、それは当事者個人の

意図した自己表明ではなく、結局は研究者の側で一定の文脈に沿った解釈にとどまる。それは数量統計数値に置き換えた無味乾燥な「データ」ではないのだけれど、いかにも解釈される余地をぬぐい切れない。しかも、それを採集する研究者は、動機の意味理解の不可能性を意識しつつも、自分こそはこの人の人生の真実を感知しているのだと思いつまとうとする。その根拠は、冷徹な実証主義・科学主義者からみれば、少々愚かなセンチメントに偏した妄念だが、これを切つて捨てるにはもう少し工夫がいると思う。

まったく違った観点だが、脳科学者茂木健一郎は、自然科学の「物理主義」では当然とされる数学的言語に対して、人文的分野がとる自然言語による記述や分析がもつ意味を、次のような「心脳問題」として論じている。

脳科学を含む自然科学の根底には、「物理主義」というイデオロギーがある。すなわち、自然言語を生み出している、私たちのほうを含めて全ての物質系は、究極的には物理法則によって記述されるという考え方である。

一七世紀から一八世紀にかけてのニュートン力学に始まり、今世紀の相対性理論、そして量子力学という二つの革命を経て、物理学は、ミクロな素粒子から宇宙の構造まで、森羅万象を記述する自然法則の基礎としての地位を確立した。情報化科学、複雑系の科学などの新しい視点の登場を経た今日でも、イデオロギーとしての「物理主義」は否定されてはいない。むしろ、コンピュータ・シミュレーションの発達により、構成要素の間の相互作用に基づいてシステムの複雑な振る舞いがあらわれるという意味での物理主義は、ますます広い対象においてその実効性が示されつつあると言えるだろう。

自然言語を生み出している私たちの脳もまた、物理法則に従う存在である。このことを認めた時、自然言語の本質を理解する上で、また、科学的文化と人文的文化の関係を考える上で、重要な論点が浮かび上がってくる。すなわち、果たして、自然言語は、物理学のメルクマールである数学的言語に還元されるのかということである。

現在、脳科学、コンピュータ科学、さらには自然言語処理の研究に携わる研究者の多くは、暗示的に、時には明示的に、自然言語は数学的言語に究極的には還元されると仮定している。特に、問題を自然言語処理能力を機能的に再現する（すなわち、「チューリング・テストに合格する」という視点に限れば、自然言語が、数学的言語に還元されるという結論は、ほとんど避けがたいものであるように思われる。なぜならば、どのような複雑なシステムであれ、法則性をもって時間発展する以上、それが数学的言語によって記述されるということが、まさに自然科学が示してきたことだからである。

もちろん、自然言語の意味を考えたとき、特に、ヴィトゲンシュタインやクリプキが問題にしたような、意味論の深遠について真摯に考えた時、自然言語が、数学的言語に還元されるという立場は、あまりにもナイヴなものであるように感じられる。

意味論については、後に脳科学に関連して再び触れることにして、私がここで検討したいのは、次のような一連の可能性群である。すなわち、まず第一に、自然言語は数学的言語に還元されないかもしれないという可能性である。さらには、数学的言語も、意味論を考える時には、それが拠って立つ基盤は自然言語と共通であり、また、世界は、従来考えられてきたように、いわゆる「数学的言語」に従うのではなく、自然言

語を含むより広い基盤の上に立つ、ある種の「言語的世界」に従うのかもしれないという可能性である。

私が、このような可能性を真剣に考慮しなければならないと考えるのは、脳科学の現場で、人類は今、従来の物理主義のパラダイムではどうしても解明できないように思われる難問に直面しつつあるからである。私は脳科学がこの難問を真に乗り越えるためには、物理主義のパラダイム、特に、世界の時間発展が数学的言語によって記述されるというパラダイムを、何らかの形で乗り越えなければならないと考える。

脳科学が直面している難問とは、物質である脳に、いかにして私たちの心が宿るかという、いわゆる心脳問題である。

脳を物質として研究している限り、方法論上の問題に遭遇することはない。たとえば記憶は、ニューロンの間のシノプスの伝達効率の変化として表現される。この変化に関与する膜電位変化、神経伝達物質、受容体、細胞内の生化学ネットワーク、さらには遺伝子制御のメカニズムがどれほど複雑でも、それらは究極的には物理的法則に従う複雑な物質系の性質として、何の方法論上の問題も引き起こさない。

脳科学が、深刻な方法論上の問題に直面するのは、脳の中の物質的過程に随伴する奇妙な現象、すなわち、私たちの心の属性を説明しようとする時である。従来、自然科学は、私たちの心のような現象が付随しない（と私たちが思い込んでいる）物質系を扱ってきた。しかし、対象が脳になったとたん、私たちは、脳が私たちの心を生み出す臓器であるという事実直面する。心と脳の関係、すなわち、心脳問題が脳科学にとって深刻な問題になってくるのである。

今日、心脳問題には、大きく三つの難問題 (hard problem, Chalmers 1997) が存在していると考えられ

ている。すなわち、クオリア (qualia) 、志向性 (intensionality) 、そして主観性 (subjectivity) の問題である。

クオリアとは、私たちの感覚の持つ鮮明な性質のことである。赤い色、サクスの音色、砂糖の甘さ、氷の冷たさ、林檎の香りなど、私たちの感覚はさまざまなクオリアからできてきている。コンピュータの中の情報表現は、一つ一つは個性を持たないビットから構成されているのに対して、私たちの心の中のクオリアは、一つ一つが鮮烈な個性をもっている。もちろん、クオリアを生み出しているもともとの物理的過程は、コンピュータの中のビットと同じように、個性のないニューロンの活動膜電位に他ならない。ニューロンの活動という物理的現象から、どのようにして、私たちの心の中のユニークなクオリアが生まれてくるのか、この問題は、心脳問題の核心のひとつである。

次に志向性は、ブレンターノやフッサールによって問題にされてきた、心のユニークな属性である。志向性とは「 \sim に向けられている」という、私たちの心の基本的な性質である。たとえば、私が赤い色を見ている時、その視覚的経験の性質は、赤のクオリアと、その赤のクオリアに向けられている私たちの心のあり方に分解することができる。視覚を支える神経機構に関する最近の知見によれば、クオリアは後頭葉にある低次視覚野から側頭葉の高次視覚野へのニューロンの活動のクラスターに随伴すると考えられる。一方、志向性は、前頭前野や高次視覚野から低次視覚野へ向かうニューロンの活動のクラスターに随伴すると考えられる。そして、私たちが赤い色を見るためには、上のようにして表現されたクオリアと志向性の間に、マッチングが成立する必要があると考えられる。

もちろん、クオリアや志向性を生み出す神経メカニズムがある程度分かってきたと言っても、クオリアや志向性の問題が依然として極めて困難な問題であることには変わりがない。そもそも、物質に過ぎない脳に、いかにしてクオリアや志向性といった私たちの心的表象が随伴するのか、この問題の根本的解決の糸口は、まだ見えていない。

主観性（「私」）の問題は、ある意味では心脳問題で最も難しい問題であるといえる。特に、いかにして、他のどの「私」でもない、まさにこの自分としての〈私〉が成立するのかという問題は、経験科学としての脳科学をいくら進めていっても、何らかの方法論上のブレイクスルーがない限り、おそらくは永遠に解けない問題である。主観性の起源を説明することは、ある意味では人類にとつて究極の問いであるといえることができるだろう。

もちろん、クオリアを感じるのも、志向性を持つのも、「私」の心である。従って、クオリア、志向性、主観性という心脳問題の三大難問はお互いに関連しあっている。

そして、これらの心脳問題の難問の背後に、言語の問題が見え隠れしているのである。¹²

茂木のような自然科学の数学的言語によって、脳のメカニズムを説明しようという立場では、語られた自然言語をそのまま「心」の理解として解釈する方法は、どう工夫しても入り込む余地はない。しかし、言葉で言葉を分析する、数学的言語を排除して、言葉だけで分析できると考える立場が、社会学における「理念主義」の伝統だといってよいのだろうか。それはむしろ、ルーマンの言う人間の社会的行為における「複雑性の縮減」が、方

法論上のブレイクスルーをもたらず可能性を考えるほうが、生産的なかもしれない。

ルーマンのシステム論に出てくる「複雑性」(Komplexität) という概念は、よく知られているように、アシュービーの多様度 (variety) の概念に由来する⁽¹³⁾。ルーマンはそこから、システムの境界内では複雑性がシステムの境界外よりも縮減されているとし、システムの境界をこの複雑性の落差に求める。アシュービーが多様度というのは、一つの集合の中に含まれた諸要素の属性における多様さの度合いである。

たとえば、もしある学校で男子の入学しか認めていないとすると、その学校における性別の多様度は一であつて、外部環境の多様度よりも小さい。情報理論の文脈では多様度を2を底とする対数によってあらわしてこれを「ビット」と呼ぶので、右の例では環境の多様度は $\log_2 2 = 1$ ビット、学校というシステム内の多様度は $\log_2 1 = 0$ ビットということになる。ルーマンによれば、この学校は、性別に関して1ビット分だけ環境よりも複雑性を「縮減」しているとする。同様にして、ある団体の成員があることがらについての専門知識の水準が高くて、その分散が一般社会におけるそれよりも小さいならば、その団体は当該専門知識の水準において環境よりも複雑性を縮減していることになる⁽¹⁴⁾。ルーマンの社会システム論からすれば、複雑性の縮減という考え方は、社会学理論上の一般性という目的に適合させるための概念化である。

情報理論も社会システム論も、富永の言う「実証主義」的立場の発展上に位置づけられるとすると、「理念主義」の流れを汲む現象学的社会学からすれば、この「複雑性」を数学的言語ではなく自然言語から読み解こうとすることになる。それは生活史が試みているような個人の生涯の語りに、整合的な「ライフ・ストーリー」を重ねることで達成されるのだろうか。

おわりに

筆者はこの十数年、社会学の方法論という場で、「実証主義」的な数理・数量化を社会現象に適用する立場と、「理念主義」的な言語分析を手がかりとする立場の諸研究を比較するというささやかな（あるいは無謀な）試みを続けてきた。現代社会の個別領域の問題を、社会調査という形で追求することの意味は、どのような方法的立場に立つにせよ、経験的研究には重要であることはいまでもない。しかし、同じ社会学というデイシプリンを立てながら、この両者の間には、そもそもまったく異なる学問観・社会観があつて、それが個々の研究においても交流不可能なほど大きな懸隔が開くばかりであるように思ってきた。それはたんに「量的調査法」と「質的調査法」のメリットとデメリットといった問題に終わるものではなく、社会科学そのものの基本問題のひとつであると思う。

この小論においても、二一世紀の新たな事態を捉えるための方法論上の溝は埋まらず、むしろ分離しつつある現状をなぞってしまった。多くの重要な新しい知見や論点を見落としているであろうと思うが、もう紙幅がなく、筆者の非力では明確な展望は見渡せない。しかし、それはどちらが優れているとか、どちらが王道であるとかといった問題ではなく、解かれるべき問題として存在し続けるであろう。

註

(1) 富永健一「現代の社会学者 現代社会科学における実証主義と理念主義」講談社学術文庫、一九九三年。

- (2) 大森荘蔵「質と量について」(『大森荘蔵著作集』第一卷) 岩波書店、一九九八年、一四七―一四八頁。
- (3) 大森荘蔵「質と量について」(『大森荘蔵著作集』第一卷) 岩波書店、一九九八年、一五〇―一五一頁。
- (4) この大森の文章は一九五六年に書かれているので、当然「青色本」『哲学探究』におけるヴィトゲンシュタインの言語ゲーム論を参照しているのだが、ガーフィンケル以後のエスノメソッドロジーについてはまだその姿はない。
- (5) 富永健一『前掲書』講談社学術文庫、一九九三年、二三七―二三八頁。
- (6) ラッセルによるヴィトゲンシュタイン『論理哲学論考』の序文。
- (7) 富永健一『前掲書』講談社学術文庫、一九九三年、一四五―一四七頁。
- (8) カール・ポパー『歴史主義の貧困』久野収・市井三郎訳、中央公論新社、一九六五年。
- (9) この時の両者の主張は、Theodor W. Adorno, Hans Albert, Ralf Dahrendorf, Jürgen Habermas, Harald Pfot, Karl R. Popper: *Der Positivismusstreit in deutscher Soziologie*, hest. Von Heinz Maus und Friedrich Fürstenberg, Luchterhand Verlag, Neuwied und Berlin, 1969『社会科学の論理』城塚登・浜井修訳、河出書房新社、一九七九として刊行されている。
- (10) 富永健一『前掲書』講談社学術文庫、一九九三年、四四〇―四四二頁。
- (11) 有末賢『生活史宣言 ライフヒストリーの社会学』慶応義塾大学出版会、二〇一二年、二七一―二七二頁。
- (12) 茂木健一郎『言語の物理的基盤——表象の精密科学へ向けて』一九九九。二月号(大修館書店 月刊『言語』編集部『言語セレクション』第3巻、大修館書店、二〇一二年)。七四頁―七七頁。
- (13) アシユビエ(William Ross Ashby, 1903―1972年) は、医学者、精神科医で、複雑系の研究の先駆者としてサイモン、ウィーナーなど、サイバネティクス・一般システム理論に大きな影響力を与えた。
- (14) この部分は富永健一『前掲書』(講談社学術文庫、一九九三年)を参照している。

参考文献

- 有末賢『生活史宣言 ライフヒストリーの社会学』慶応義塾大学出版会、二〇一二年、二七一―二七二頁。
- 大森荘蔵「質と量について」(『大森荘蔵著作集』第一卷) 岩波書店、一九九八年
- 関雅美『ポパーの科学論と社会論』勁草書房、一九九〇年。

「数字」と「言葉」序説

「数字」と「言葉」序説

富永健一『現代の社会科学者 現代社会科学における実証主義と理念主義』講談社学術文庫、一九九三年。
ニクラス・ルーマン論文集1 『法と社会システム 社会学の啓蒙』土方昭監訳、新泉社、一九八三年。

Luhmann, Niklas. *Soziologische Aufklärung, Bd.1, Opladen: Westdeutscher Verlag, 1970. SS115-116.*

Russell, Preface to Wittgenstein's *Tractatus Logico-Philosophicus*. London: Routledge & Kegan Paul, 1961 (奥雅博訳『論理哲学
論考』の序文、ワイトゲンシュタイン全集1・大修館書店)。

林知己夫『数量化の方法』東洋経済新報社、一九七四年。